
Song for L...

ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S o n g f o r L . . .

【Nコード】

N 3 1 4 9 M

【作者名】

ゆう

【あらすじ】

- あらすじ

>大災厄から一ヶ月あまりが過ぎたシブヤの街。
人の少なくなった街。現実との乖離。悩む彼らはひとつの>夢くを始める。

それは音楽を異世界でも広めること。

そのために彼らは動き出す。まだ見えない地平へ。

- 注意事項

橙乃ままれさんのログ・ホライズンの二次創作です。

原作を読まれていない方にはわからないところがあると思いますので素敵な原作をぜひ読んでいただければと思います。

原作が大好きな方。オリジナル要素を、寛大な心で見逃してくれるとうれしいです・・・。

Start for music

満員のライブハウス。熱狂する観客。ライブは盛り上がり、エンディングへと向かおうとしている。ミーハー丸出しのギターソロ。耳をつんざくようなディスティーション。一瞬の静寂。そして、沸きあがる歓声。ああ、これはいつもの夢だ。

失われた現実。バンドを組んでいた>向こうの世界<での出来事。とはいっても、真実はまぜこぜで、そんなに人気があったわけじゃないし、来てくれていた人たちもファンというよりは友達のほうが多かった。

でも、その風景を拝むことはもうない。僕たちは>エルダー・テイル<という>異世界<にやってきてしまっているのだから。

僕たちが>大災厄<と呼ばれる事件に巻き込まれてから1カ月以上たち。その夢は所々欠けながらも、僕の胸をかきむしっていた。

「人、いなくなっちゃったねえ」

この間まで人があふれていたシブヤセンター街の通路を眺めながらリサが言う。

アキバの街の革命は、シブヤの街に壊滅的な打撃を与えた。

もともとゲートに頼った重要性が売りだったシブヤの街は人が徐々に減る一方だったのに、それに加えてアキバの革命。シブヤにいう意味をなくしてしまうような出来事だった。

それに伴う必然の人口移動。もはやシブヤは小数の冒険者が使う街になっていた。

「まあ、アキバがあれだからな。みんなの気持ちはわかる」

ぶっきらぼうに言う。手にはアキバで買ってきたサンドイッチ。それを一口で食べて、続ける。いつものやり取り。

「でも、俺はここに残るよ？　ここが好きだったから」

その言葉で傷ついたような表情になるリサ。そんな表情が見たくて行ったわけじゃないのに。だから、おどけるように言葉を続ける。「それに、さ。もし帰れるとしたらゲートがいっぱいあるこっちのほうで、先に帰れるようになる可能性が高くない？　そういう邪悪な読みもあるんだよ」

そこまで続けて、ようやく小さく笑ってくれる。それでいい。リサには笑っていてほしい。俺にできることなんて、それぐらいなんだから。あいつのように喜ばせることなんて出来やしないんだから。「ま、でも。おいしいものを食べるときにちよつと遠出しないといけないけどな。あゝあ。＞RP・jrkのホットサンド食いたいなあ」

「今食べたばかりじゃない」

「これはただのサンドイッチ。俺が食いたいののはホットサンド」

「ホットサンドなんてこっちでも売ってるじゃない」

「バカだなあ。＞RP・jrkのホットサンドは一味違うんだってあのホクホクのポテトの中にアクセントで入っている明太子の味と食感たるといえば、もう！！　あれを作った彼らを一生尊敬したいぐらいだね！！」

「はいはい。尊敬してなさい。尊敬して、買ってりゃいいのよ。明太子バカ」

「な、おまつ！　いくら明太子が嫌いだからといって馬鹿にするとだな、バチが当たるぞ！！」

「いいもん明太子のバチなら。あたしどうせ一生食べないしー」

「つく、このやろう。絶対食わす。そして、目を覚まさせてやる」

「いいけど？　力づくで食べさせようつても、腕力勝負であんたに負けた記憶ないし、あつちでもこっちでも」

「ぐっ……」

「悔しいと思うなら＞法儀族く選んだあんた自身を悔やみなさい。刺青がかっこいいとか言うふざけた理由で、選んだバチよ、バチ。」

あんたにこそバチが当たってるじゃない」

「うっ……」

正直リサに口論で勝てた記憶がない。腕力でも勝てたことはない。・・・つか腕力は勝てるようになってから俺が一方的に遠慮しているだけであって、勝てないわけじゃないことを付け加えておく。いや、こっちだと腕力補正の装備をつけたリサには本気で勝てないんだが・・・いや、それはいいとして。

「今日はどうする？俺はレッスンに行こうかと思っているんだけど」

「リヨウ、話をそらしたわね。しょうがないか、わたしも今日は思いつき歌いたい気分だから、それに付き合っただけあげる。他のメンバーは？」

「まったく決めてない。というか、俺も叫びたい気分なんだよ」

「私に口で負けたから？いつものことじゃない」

「ぐっ・・・じゃなくてな。なんだか、こうしてずっと>冒険者<として過ごしていると忘れそうなんだよ。大事な何かを」

忘れそうも何も少しずつ忘れている。気がついたのはこの間、昔好きだった曲を演奏しようとして、メロディーを思い出せなかったとき。正確には思い出せないじゃなくて欠損していると気がついたとき。好きだという感情はあるのに大事なものだけが奪われたような、あの虚無感は今でも恐怖を覚える。結局は同じ曲を覚えていたりサが教えてくれて事なきを得ただけ。

でも、そのずれは多分リサにはわからない。一度も死んでいないから、一度も殺させていないから。そして、これから先も死なす気はないから。

「忘れるわけじゃない。ううん。忘れても思い出させてあげるよ。どーせちっさい時から一緒だったんだし。忘れたいことだっただけ、思い出させてあげるよ」

明るく言う彼女に目を細めて笑う。僕のこの気持ちは彼女にはわからないだろうし、わかってほしいと思わない。君だけは忘れない

でいてほしいなんて、都合のいい、気味の悪い思い、伝わらなくていい。

「まあ・・・それを言ったら俺も同じことを言い返してやるよ。寝ぼすけ修学旅行大遅刻で一人で来たよ事件とかな」

「それ禁止！ 忘れている事件をほじくり帰さないでよ！！」

「お前が売ってきたケンカだろ？ 俺は買ってやって倍返ししてやっただけだ。文句を言われる筋合いはない」

「そういうヒドイところが女の子と付き合っても、すぐに別れちゃう原因なんだよ！ ばーかばーか。冷血漢の人でなし」

はいはいと聞き流しながら歩いていると街の端っこ。外と街をつなぐゲート付近まで到達する。唯一シブヤでにぎわっているところ。パーティー募集の人間と、それ目的の売店が並ぶ風景。ゲームだったころにもよく見たけど、ゲームと違うのは、パーティー募集のふきだしは出ていないって事と売店には飲食関係が多いって事。これを見るたびに異世界に來たんだって思い知らされる。

「何を暗い顔してんの。根暗な顔がさらに暗くなってちゃ誰もパーティーなんて誘ってくれやしないよ」

「暗くなってるじゃないって。っつーか、俺の顔は根暗じゃない」

「じゃあ、むっつり？」

「むっつりはお前」

「レディをスケベ扱いしたな！ この変態ベーススト！！」

「先にスケベ扱いしたのはお前じゃないか。それになんだよ、変態ベースストって」

「あんた、あんなねちっこいベース弾くくせにわかってないわけ？ だから根暗でむっつりで変態なのよ」

「俺はねちっこいベースかもしれないが、根暗でもむっつりでも変態でもない」

「どうだか・・・あつ」

いきなり理沙は話を打ち切って手を振る。どうやら知り合いらし

い。

装備から見て>クレリック<っぽい。回復職どうしは綿密な役割分担が必要だから自然と仲良くなるらしい。そんなことを思いながら回りを見回す。パーティー募集している面子は30人弱。40レベル前後の人間は・・・と探しはじめたとたんに空を仰いだ。どうやら今日の運は最悪らしい。

向こうも俺を見つけたようでやってくる。でかい盾をもったここから見ても>ガーディアン<の男。

男が近寄ってくるのにリサも気がついたようで>クレリック<の女の子と一緒にやってくる。都合4人。バランスは悪くない。悪くないだけに強制的に決定されそうなのがいやな空気だ。溜息をひとつついて、やってきた男に話しかける。

「何のようだ、ヨシユア。誰もパーティーを組むなんていつていないんだが」

あえて、冷たい声で話しかける。これぐらいしないと奴には効かない。

「冷たいこというなって。ここにきてただの買い物ですなんていう奴なんていないはずだぜ？」

げはは、とバカっぽさそうな声を上げる。バカっぽいのではなくて、本当にバカなんだが。

こいつとパーティーを組んだせいで死んだのは両手であまる。>ガーディアン<の癖に見栄っ張りで目立ちたがり。いわく、一番かつこよさそうだったから>ガーディアン<を選んだ。バカの台詞だと疑いようがない。

しかも、一番性質が悪いことに、こいつは俺を信頼しきっている。頼りになるリーダーだと思い込んでいる。ゆえに、すぐに俺とパーティーを組みたがる。最悪の連鎖が高まりすぎてどうにもならない奴だ。

もちろん本当に役に立たない奴かという、そういうわけではない。同レベルの間では親しみやすさもあるし、戦闘力もあるのでそ

こそ強い。ただ、壁役としては使いづらいただけで普通のパーティーとしてなら問題はない。せめて後一人前衛がいれば何とかできる。そこまで読んだところで気がつく。

三人はもうすでに意気投合しているらしく、パーティーを組むのは確定的になっていた。これじゃまずい、とあわてて周りを見回したところに、おずおずと声をかけてきた娘がいた。娘じゃ失礼か。

「あのお・・・パーティーに入れてほしいんですけど・・・」

蚊の鳴くような声で語りかけてきたのは、サムライくしかも珍しい遠距離線型の弓使い。長距離打撃力に薄いこのパーティーならありか？　と思ったところでヨシユアの（余分な）声が入る。

「おう、アズサじゃないか。人見知りは直ったのか？」

人見知りの奴に大声かけるなよと、こめかみの辺りを押さえつつアズサと呼ばれた娘を見ると、俺のズボンの端をつかんでヨシユアに対して隠れるようにしていた。その姿に思わずあいつを思い出す。頭を振って、その思いを一瞬で振り払って、もういちどアズサを見る。ヨシユアの大声にもめげずにこらえているところを見ると、どうやら怖いけど、パーティーには入りたいらしい。

「アズサと言ったね。レベルは？　一応40レベル前後で集めているのだけだ」

精一杯優しい声で聞いてみる。ヨシユアが後ろで「俺のときの態度とぜんぜん違うじゃないか！」とわめいているが無視する。

「45なんですけど・・・だめですか？」

予想よりも高い数字にびっくりする。俺よりもひとつ上。リサとパーティーの組める許容ぎりぎりの数字。ヨシユアは俺と同じだったので気にしない。となると後一人が問題だが聞いてみると42と問題がなかった。

人数も最低限足りて、準備も整った後は自己紹介とパーティーを結成。そして出発だった。

その時はまだ気がつかなかった。まさかこいつらとバンドを組むなんて。

そんなまだ夏に入り始めるかどうかと言う季節。太陽だけは現実と同じく燦々と輝いていた。

Set up at river side

それからしばらく待ったけど、誰も来ないので5人でパーティーを組むことにした。パーティーの名前はWorld End。リサが”また？”という顔をしてくるが仕方ない。俺の好きなバンドの名前だ。好きなモノは仕方ないだろ？

5人のパーティーの結果はといえば、予想通りのものだった。あえて言えば決定力不足。アズサの弓は強いんだけど魔法に比べて使いやすさにかける。

乱戦に使えないし自動命中するというわけではないので、使える場所が限られる。

しかし、逆に言えば場所さえあれば魔法よりも長距離の射程というのは心強い。

それ以外の収穫としてはヨシユアが本気でやればまともに使えるやつなんだとわかったのが驚きだった。

曰く「あっちの時は遊びだったからが、こっちじゃまじめにやることにした」まじめじゃなかったせいで削られた俺の経験値を返せ。

などと、紆余曲折はあったものの最低限のパーティーとしての機能は果たし、このメンバーでしばらくパーティーを組むことで全員の合意が得られた。

初日は隣接の低レベルゾーンで戦術の確認。そしてしばらくパーティーをやっていくことの確認。

二日目は少しレベルを上げたところで同じく戦術の確認。戦術がなくても対処はできるが、戦術があれば効率を上げられる。ゆえに熱も入る。基本的にヨシユアが囃、アズサがメインアタッカー。俺が洩れた敵を倒すというパターン。状況によってはリサが倒す場合もありというところ。五人中四人がアタッカーに回ることができないもないので、最大殲滅効率は悪くない。悪くはないのだけど、決

め手に欠く。

決め手に欠くということは戦術の積み重ねがダイレクトに結果に反映されるということ。

自ずと俺への負担が増えるはずなのだが、そこはエトがうまく補佐してくれている。もともと>クレリック<は攻撃に参加しないことが多い分、全体の把握に努める人間が多いのだが、エトもその例に漏れず、うまく全体をコントロールしてくれている。攻撃については若干把握し切れていないところがあるが、そこは俺の領分なので問題なし。

そうして、二日目が順調に過ぎていった。日も傾き始めたので狩りを中断し、野営地になる>アラカワリバー<のほうへと進むことにした。

何事もなく到着すると、すでに川縁には複数の集団が野営の準備をしていた。

……訂正する。野営の準備どころか露天まで来ていた。

理由はわかる。このあたりは低レベル用の狩場だし、小一時間歩けば中堅どころから上級者用の狩場まであり、さらにはあたりは平坦で見通しが利くという、いたせりつくせりの場所。人気がないはずもない。

しかし、はずもないけど、そこに露天まで持ってくる生産職の図太さには恐れ入った。

呆れているところに、ヨシユアがさも当たり前のように話しかけ、場所を確保していた。あいつもいい加減図太いな。

ぼおっとしても仕方ないので野営の準備をする。テントは二組。交代で寝ながらという予定だったが、周りにもパーティーがあり、どうやら楽できそうだなと安心をする。

そんなところに話しかけてくるグループがあった。ギルドタグは

>D・D・D<有名所どころではない、シブヤはおるか五大都市すべてに名前が知れ渡っているだろうギルド。PK狩りかと思って身構えたところでリーダーらしき人物が話しかけてくる。

「ようこそ、アラカワの畔へ。アキバから派遣されてきています、セオといいます。アラカワの畔の警備は私たちが行っていますので十分休んでください」

と好意的な笑みを浮かべながら告げてくる。詳しく話を聞くと、食料その他資材を調達する交易ルートを構築する都合上の拠点として作ったのだけど、冒険者にも開放しているらしい。

健全に成長していくアキバとシブヤの状況を考えながら、感謝の旨だけ伝えると、セオは去っていった。どうやら、この取りまとめ役らしい。おそらくは・・・いや、やめておこう。念の入ったことだと思いながら野営の準備をする。

出ている露天はポーション系、装備系、そして何よりも食べ物系が多かった。

食糧事情のあのみずさはもはや忘れ去りたい記憶になりつつあるが、その素直な発散がここまでできているのと、何よりも刺身をここでやる根性には、商才たくましいやらなにやら、ほほえましいものを感じた。そして、それに羨ましさを覚えなかったといえばウソになる。

野営の準備も終わり、夕食。

出ている露天で買うかという話になったけど、それはやめておいて、>料理人<でもあるというエトの料理を食べることにした。「独身男性の一人暮らしレシピですよ」という彼の言葉には苦笑しながらうなづく。たしかに、家で食べているご飯に近い。男の料理というのはよほど凝るか、そうでなければ手抜きという点では似るらしい。

食事も終わり、後片付け。川で食器を洗い始める。隣で同じように食器を洗っているリサが鼻歌を歌い始める。聞きなれたメロディ。エルダー・テイルのオープニングのアレンジバージョン。向こうの世界で出されたコンピレーションアルバム。懐かしい音に身を任せながら、食器を洗っていると、隣から食器をたたき音が混ざってきた。横を見てみるとヨシユアが茶目つ氣たつぷりの顔で食器とか辺りにあるものを何でも叩いている。リズムは・・・あっている、というか巧い。思わぬ組み合わせに周りの人たちも集まり始める。

氣がついていないリサは一曲歌い終わると、ふいに起きた拍手にびつくりして周りを見回す。

ヨシユアはそれを見て笑っているし、リサは顔を真っ赤にしているし、周りの観客は続きを期待するような目で見てくるので、大変だった。というか、ヨシユア覚えている。

ようやく後片付けも終わり、テント前。焚き火を前にしての雑談。そこで恐るべきことが発覚した。ヨシユアが実はプロのミュージシャンでかつ・・・いいたくはないが、俺の好きなバンドのドラムをやっていたということ。ショックがですぎて凹んでる俺の肩を叩いてガハハと笑うヨシユア。

パーティーを組んで成功だったけど、失敗だったと激しく後悔した。

Swinging Sounds

数日間に及ぶ長い狩が終わり、十分なだけの成果を元にシブヤへと戻ってきた。

出かける前とあまり代わり映えのしない大通り。あえて言えば、知らない人間が増えたのか？ あちらこちらに>冒険者<が増えていた。

ただ、やはりシブヤに比べると活気はなく、どこかさびしげな印象を受ける。

なんだかなと苦笑を浮かべながら、パーティーを解散する。半月分ぐらいの稼ぎは出来た。しばらくはゆっくりしようかな？

そんなことを考えながら、いつもの宿屋を借りようとしたところで人だかりを発見する。そして久しぶりに聴く……音楽。

その場に立ち止まる。他愛もない遊びなら時々やっていただけ、まともな音楽がこちらで望めるとは思わなかった。望んでいいとは思わなかった。

いてもたってもいられず人ごみを掻き分け前のほうに行く。

目の前には音楽家たちがいた。

楽しそうに歌う女性、美しい旋律を奏でるバイオリン、リズムを刻むドラムスにそして、もう見ることはできないのだと諦めていたウッドベース。

演奏が終わり、拍手が起こる。みんなも音楽に飢えていたのか拍手は鳴り止まない。

しきりにぺこぺことお辞儀をするバイオリンを手に持った女性。拍手が鳴り止むのを待って、彼女は話し始める。

「皆さん、今日は私たちの野外ライブにお付き合いいただきありがとうございます。皆さんもご存知のとおり、私たちは>エルダー・テイル<の世界にやってくることになりました。その始まりは突然で、そして手探りの状況でした。ですが、私たちはここに>音楽<を取り戻すことができました。これは始まりです。私たちはこれから、私たちの音楽を取り戻していきます」

柔らかな声で紡がれる断定は、意思をただ示したというだけではなく、周りにいる人を巻き込むような魅力をたたえていた。

その言葉に感動しながらも、悔しさを覚える。知らず知らずの間に手をかたく握り締めている。わかつている。これはただの嫉妬。音楽を取り戻した彼女たちと、そして続いていくしかない自分たちとの差。開墾された場所は開墾されたもののもの。開拓の基本。

だからこそ、強くあこがれ、醜く嫉妬する。その表情に気がついたのか、彼女は言葉が続ける。

「さて、私たちは音楽を取り戻しました。ですが独り占めするつもりはありません。私たちが持っている楽器以外にも幾つかの楽器を取り揃えています。腕に覚えのある方、挑戦をお受けいたします。もちろん今からでも」

そう言ってこちらに視線を向ける。「やりたいのでしょ？」瞳はそういつている。わかりやすい挑発だ。

だが、それでも、それに乗らないでいられるほど、俺は音楽に飢えていた。

意を決して一歩踏み出すと、彼女は話しかけてくる。

「あら、早速の挑戦者。楽器は何を選びますか？ もちろん私のバイオリンでもいいし、ほかにもギターもあります。まだ準備ができ

ていませんでエレキギターなどは無理ですが、弦楽器ならかなり……」

彼女の挑戦の言葉を行動でふさぐ。選んだ楽器はウッドベース。使っていた彼に礼を言つて、自分の音に合わせる。

一つ目の音から始めて手馴れた動作で調律をしていく。調律を終え、一息。

何度となく感じたリズムを奏ではじめる。この街のテーマソング。それに気がついたドラムが、俺の音に合わせて叩き始める。バイオリンを持った彼女は「やつと？」という表情で弓を高く掲げると、音楽を引き始めた。即興のセッション。同じ旋律を互いに競い合い、遊びあう。それはすれ違いながら響きあい、音楽を作り上げる。久しぶりの感覚、楽しいという感情。相手の感情がダイレクトに伝わってくる。互いに確認しあい、試しあう。最後のバイオリンのソロが弾き終えるまでの一瞬一瞬が気の抜けない、信頼できるライブだった。

最後のソロを見事に引き終えた彼女は笑顔で微笑むと、割れんばかりの拍手に応えていた。

かなわないな、と思いつつ苦笑いしていると彼女は突然近づいてきてこういった。

「ねえ、私たちのギルドに入らない？ 音楽家を集めているの」

Swinging Sounds (後書き)

もう忘れられていると思いますが、ようやく第三話投稿です。ようやく音楽らしくなってきました。

本編のほうでとある職業が出てきたので、エレキギターをめどが立ってきました。そこが一番悩ましいところでした。(電源がないのでどうしようとか・・・ね)

ようやく楽器が出てきました。今後どんどん出す予定です。

カホンは出したい。あとパーカスとフルート。・・・どんな音楽だ？(笑)

さてさて、ようやく続きを書く目処ができてきたので今月中にはがんばりたいと思います。ではでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3149m/>

Song for L...

2010年10月8日10時39分発行